

子どもと保育の情景 (17)

## 気持とちが集まる一瞬き

戸田雅美

四歳児クラスの十一月のことである。

朝から思い思いに遊んでいた子どもたちは、片づけを終えて、保育室に集まっていた。これから、みんな「じゃんけんゲーム」をやるといふ。担任が、そう提案すると、子どもたちは、「やったー」と隣の子どもと喜び合った。どうやら、この遊びは、何回かみんなで行ったことがあって、楽しい思いがあるのだろう。

その中で、まやは、一人で部屋の隅の流しの前に座り込んで、「いやだ、やらない！」と言いながら、時どき、声を大きくしながら泣いている。つい最近、このクラスに入ってきた子どもがいると教え

られていたのだが、それが、まやだったと、私は、このとき改めて気がついた。紹介されたときには、まやも砂場で楽しそうに遊んでいたので、特に気にならなかつたのだ。まやにしてみれば、こんなふうに、みんなが共通に知って楽しみにしていることに、自分が参加しきれない感じがして、つらくなつてしまったのかもしれない。

このクラスには、いつもはもう一人担任がいるのだが、この日はたまたま休みで、いつもはいない別の保育者が代わりに入っていた。子どもたちの前に立たっている若い担任に比べると、ぐととベテランのこの保育者が、まやの傍らに行く。私の位置から

少し離れていたの、何を話しているのかは聞こえなかったが、まやは、この保育者の誘いを断っているらしい。なおもしくしくと泣き続けていて、時折、じれたように泣き声が大きくなっていった。

担任はその二人の様子を見ながら、しばらく迷っていたが、「じゃあ、まやちゃんが来るまで、みんなは二つのチームに分かれようかな」と言うと、子どもたちは、それぞれいすを持って右往左往し始める。どうやらチームに分かれて、保育室の右と左に一列にいすを並べて座るらしい。けれども、それぞれが、一緒に座りたい子どもがいるらしく、せっかくな座った子どもも一人が動くと、連れ立ってうろうろし始めるので、なかなか全体が落ち着くことがない。そのうちに、はるひろが、のりゆきを無理やり動かそうとしてトラブルになってしまった。はるひろは、最初、大好きなりょうたの隣に座っていたはずなのに、りょうたと一緒に動いているうちに、の

りゆきが、りょうたの隣に座ってしまったらしい。

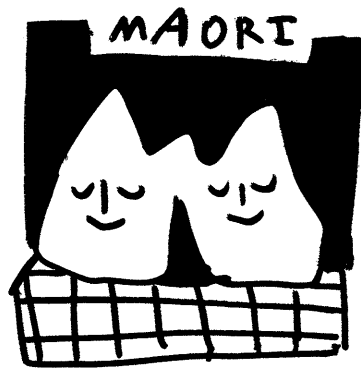
子どもたちの前に立っている担任は、まだ経験の浅い若い保育者である。私は、この混乱を見ながら、チームの分かれ方について、あらかじめ少し話しておけばよかったのだろうか……と考えた。そうすれば、こんな混乱はなかっただろう。

しかし、トラブルにもかかわらず、また、なかなかゲームが始まらないにもかかわらず、ほかの子どもたちには、いらいらしたような様子もなく、相変わらず楽しそうな雰囲気である。担任のもつ柔らかい雰囲気もあるかもしれないが、子どもたちなりに、自分たちであれこれ考えながら、一緒に動くということそのものが、今は、楽しいのだろうとも思えてきた。

ようやくトラブルも解決し、いよいよゲームが始まった。このクラスの「じゃんけんゲーム」とは、みんなで歌をうたいながら、両方のチームから順番

に一人ずつ前に出て、歌が終わったところで、じゃんけんをする。負けた子どもは指定の場所に移る、というゲームらしい。単純なゲームなのだが、みんなでうたったり、じゃんけんの勝負を見守るときのわくわくした感じが楽しいらしい。同じチームの子どもを一所懸命に応援する姿には、一緒に自分がじゃんけんをしているかのような楽しさと真剣さが感じられる。

「まやちゃんも、やってみる？」と、二人目同士の勝負が終わったとき、まやとはちようど保育室の反対側にいた担任が、まやに声をかけた。実は、ゲームが始まり、歌が盛り上がると、ほぼ同時に、まやの目は、ゲームをする子どもたちじつと注がれていたのだった。まやは、ゲームに見入るうちに、すっかり泣くことを忘れたようになっていた。このことに、担任は、クラスのゲームを進めながらも、ちゃんと気がついていたので。



担任のこの言葉に、クラスの子どもたちも、みんな一斉に、まやを見る。一瞬、にぎやかだった保育室の中が、しーんと静かになった。まやは、どうするのだろう……。入るのかしら……。また、せっかく忘れていたのに、仲間に入れなかったことを思い出して、泣いてしまうことはないのだろうか……。でも、まやは、泣きもしなかったが、即断しかねたのか、動かなかった。

「いいから、進めて」と、先ほどからずっとまやの

そばにいた保育者が、すぐにまやの代わりに答えた。再び、ゲームが始まった。結局、このゲームが終わりに近づいたころ、まやは、傍らにいた保育者と一緒にこのゲームに参加することができた。そのときには、担任も、クラスの子どもたちも、まやの参加を歓迎し、なかなかいい雰囲気だった。

担任が、まやを誘ったとき、クラスの子どもたちの気持ちが、すっと集まったのを、私は感じた。まやも、その前までのようではなく、誘ってくれている担任と子どもたちの気持ちを感じていたようにも見えた。あの一瞬が、もう少しそのままであったなら、まやは、子どもたちは、どうしたのだろう。

ゲームの始まりまでに時間がかかっていたことや、先ほどまで泣いていたまやのことを考えると、もしかしたら、もうひと波乱起こってしまったかもしれない。せっかく、子どもたちが、気持ちを向け

ているのに、まやが、またひどく泣いてしまうかもしれない。子どもたちのほうが、気持ちが続かずに、「はやくー！」と不満の声に変わってしまいかもしれない。そうしたら、担任として、また子どもたちと考えていかななくてはならない。

それでも、私には、あの一瞬の「その後」を、子どもたちに引き受けさせてみたいという気持ちが残った。もし、あるとき、子どもたちの気持ちが、あんなふうに、集まっていなかったら問題はまったく違う。単なる混乱には何の意味もないだろう。でも、みんなの気持ちが、集まったとしたら、その後を進めるのは、その子どもたちの気持ちであっていいはずだ。

「子どもとともにつくる生活」とは、単なるスローガンではなく、こんな一瞬の保育にあるのだろうかと考えさせられた「一瞬」であった。

(東京家政大学)